

黒瀬川帯内の非ジュラ紀付加体要素の帯状配列 九州と四国以東との比較

Juxtaposition of the constituents other than Jurassic accretionary complexes in the Kurosegawa Belt

山北 聡[1]

Satoshi Yamakita[1]

[1] 宮崎大・教育文化

[1] Fac. Edu. & Cul., Miyazaki Univ.

九州の黒瀬川帯では、古期岩類（先シルル紀火成・変成岩類、シルル-デボン系）や、これに重なるペルム紀～白亜紀の浅海層およびペルム紀混在岩層などの、非ジュラ紀付加体要素は、3列に分かれて、それぞれ向斜をなして分布している。これらの向斜の間の背斜部には、ジュラ紀付加コンプレックスが分布するか、もしくは軸部に断層が存在し、非ジュラ紀付加体要素からなる向斜部どうしが接している。豊原ほか（1998）は、これらの向斜部間でペルム系の層相に違いがあることを指摘し、また田代・池田（1987）、田中ほか（1998）などによって、岩相・二枚貝化石相を異にする2種類の同時代の白亜系（物部川層群型と南海層群型、南海層群型の一部は中九州層群とされることもある）が識別されているが、これらは各向斜部で分布を異にする。そのほか、向斜部間では、各時代の地層の発達程度にも有意な差が見られる。本講演では、これらを総括して、九州黒瀬川帯における非ジュラ紀付加体要素の帯状配列を整理するとともに、四国以東の黒瀬川帯との比較を行い、黒瀬川帯の構造発達史について考察する。

九州の黒瀬川帯について整理すると、以下のようになる。3列の向斜部を北より順に、北列・中列・南列と呼ぶ。

【北列】

ペルム紀混在岩層とその上位の白亜系が広く分布するのが特徴である。三重町地域のハイダテ山向斜部が典型で、五ヶ瀬地域の芝之元向斜部や球磨川地域の日奈久帯北半部がこれに相当する。白亜系は、物部川層群型と南海層群型との両方が存在し、後者は中九州層群と呼ばれている。両タイプの白亜系間の関係は必ずしも明瞭ではないが、三重町地域では、物部川層群型のものから南海層群型のものへ時代とともに移り変わる。ペルム紀混在岩層と白亜系以外の要素の分布は、三重町・五ヶ瀬両地域では乏しく、わずかに古期岩類や三畳系が白亜系の下位に分布するのみだが、球磨川地域からその東方では、ペルム紀混在岩層と白亜系の間に厚いペルム～ジュラ系や古期岩類が見られる。なお、球磨川地域で北列のさらに北側に位置する宮地帯は、北部秩父帯の要素と考えられる。

【中列】

南海層群型の白亜系が広く分布するのが特徴で、その下位にペルム系～ジュラ系も存在するが、一般には白亜系に比べると分布が乏しい。さらに下位には古期岩類が重なっている。三重町地域の山部向斜部が典型で、五ヶ瀬地域の祇園山-大石向斜部や球磨川地域の日奈久帯南半部がこれに相当する。この列の白亜系は、三重町地域の山部層が南海層群に対比されている以外は、北列のものとともに中九州層群と呼ばれているが、岩相・化石内容・下位層との関係のいずれも山部層や模式地の南海層群と共通しており、南海層群とするのが妥当で、中九州層群は上述の北列のものに限る方がよい。

【南列】

三重町地域の榎峰向斜部、五ヶ瀬地域の利根川山向斜部、球磨川地域の坂本帯などがこれにあたる。古期岩類の上位に浅海相のペルム系～ジュラ系が重なり、白亜系の分布に乏しいのが特徴である。わずかに分布する白亜系は中列と同じ南海層群型である。

四国以東の黒瀬川帯の各部分についても、上記3列のいずれかに対応させることが可能である。ただし、中列の一部を除き各列が明瞭な向斜構造をなさない場合が多く、また3列のいずれかを欠く。たとえば、四国東部坂州地域では、古期岩類の上位にわずかのペルム系・三畳系を挟んでジュラ系と白亜系（南海層群）が重なり向斜をなす中列と、ジュラ紀混在岩を挟んでその南側に分布するペルム系・三畳系・ジュラ系が卓越し白亜系を欠く南列とが識別できるが、北列を欠く。また、四国中東部物部川地域では、南海層群が広く分布しており、中列に相当するが、他の列は認められない。一方、四国中央部の佐川-高知地域では、北側に物部川層群型から南海層群型に移行する白亜系が分布する北列と、白亜系をほとんど欠き三畳系・ジュラ系が卓越する南列とが識別でき、ここでは中列を欠くようである。そのほか、紀伊半島西部の広川地域では、古期岩類の上位にわずかにペルム系を挟んで南海層群が向斜をなして広く分布しており、中列に対比できる。ここではその北側に北列が存在する可能性はあるが、南列は確認できない。

以上のような帯状配列の特徴の黒瀬川帯の構造発達史における意味を考察すると、第一に、北列と中列・南列とは、白亜系の岩相・古生物地理やペルム系混在岩層の有無の点で相違が大きく、両者の間に相対的に大きな

構造的不連続（おそらくはある程度の変位量をもった横すべり）の存在が予想される．第二に，四国以東の黒瀬川帯は九州のものに比べて分布幅が狭いが，この一因は九州黒瀬川帯の構成要素の一部を欠くことにある．欠ける部分は，地域ごとに異なる．この欠落を生じさせた要因としては，やはり横すべり運動との関連が想定される．